

卒)



早朝の沐浴をボートから眺めた私達は、火葬場近くのガート（死者の家）の岸から上がり、いたる所に落ちている牛の糞を避けながら緩やかに上っている石畳の路地に入って行った。ベナレスのガートの狭い路地には、薄い煙が靄のように立ち込めていた。びっしりと積まれた薪の山や薪の量を計る天秤秤を横目で見ながら川岸を見下ろすと二か所で薪が燃やされていた。左の炎は大きく激しく燃え上がっていた。右のオレンジ色の小さい炎の横には炎よりさらに鮮やかなオレンジ色の布に包まれた遺体らしきものが横たわっていた。煙が路地に流れ込んでいる。ベナレスについては以前からいろいろな話を聞いていた。ヒンズー教徒は、死ぬためにこの地を目指し、不幸にもその途次で死を迎えた場合、所持している財産の多寡によって死体を焼く薪の本数が決められるから背中だけ焼かれた半焼きの死体が川に流されているとか、子供など未成年者は焼かれることなくガンジス川に流すことで母の胎内に帰っていくのだとか、妊婦の遺体はそのまま流すのだとか。そして、それら死体の中には川の中に打たれた杭に引っかかるものもあり、その目や腸をカラスがつついていてる情景を目にしたといった話である。

ここは、一般の観光客が立ち入らない区画だと言う。案内人からはカメラを向けないように注意されていた。すれ違うのがやっとの細い路地には大きい牛が佇んでいたりと、オートバイが後ろから走ってきたりするのだが、私達は牛に触れないように脇をすり抜け、後ろからくるオートバイを避けて石畳を上って行った。路地の両脇に不規則に立ち並んでいる薄汚れた家屋や店舗の中には玄関や屋根が半壊しているものもある。石積みの横穴に埃まみれのオートバイや自転車が置かれている。生身の人間の蠢く息吹を感じながら、みんな無言で歩を進めて行く。石畳の突きあたりを左に曲がったところからイスラム寺院とヒンズー寺院が一体になっている寺院を眺めた。ヒンズー教徒が造った寺院をイスラムが壊し、イスラムの寺院を建てたのだが、ヒンズー教徒がこのイスラム寺院を半分壊してヒンズーの寺院を造ったのだと言う。そのため、騒動が頻発しているらしい。ライフルや自動小銃を持った5～6名の警察官たちが警戒に当たっていた。この路地には土産物を売る露店がたくさん立ち並んでいる。観光地になっているのだろう。

やっど、大通りに出た！騒然とした早朝の通りにはオートリクシャーが所狭しと並んでいた。私達は3台に分乗してバスに向かった。4人乗りのリクシャーに定員通り乗っているのは3台だけである。学校へ子供を送って行くと思われるオートバイやいたるところにたむろする牛たちに注意しながらバスの駐車している所に走って行くのだが、悪路と混雑で後ろから来ているはずの仲間のリクシャーを見失いがちになる。何かに追われるような気持でバスに乗り込んだ。ホテルに帰ってから朝食である。

今回の仏跡巡りには私を入れて10名が参加している。前回一緒に来た安中さんは94歳の最長老で祇園精舎国とルンビニーとブッダガヤの霊鷲山近くにある日本山妙法寺を訪ねることに執念を燃やしている。学校の先輩で近藤さんと言う人は83歳、底抜けに明るく下ネタが好きで、笑うと目じりが下がり人懐っこい顔になる。近藤さんの後輩の長田女史さんは76歳、設計事務所のオーナーである。山田先生は76歳で、弊社の顧問弁護士であるが遊び仲間でもある。山田先生は、貴族を自称しているが下町の江戸っ子である。今回は、奥様の由美子さんが同行している。この6名が東京組で、関西から私の同級生の井口さんと後輩の森女史さん、梶女史さん。徳島からは同級生の木下さんが参加している。総勢10名、平均年齢約74歳である。

2017年11月30日、関空を飛び立って11時間！デリー空港に着き入国審査を終えたのは現地時間で夜の10時過ぎであった。迎いのバスを待っていたところホテルで待機していた現地の案内人が脳梗塞を起こし救急車で病院に搬送されたとかで代替りのガイドを手配しているので少し待っていてほしいと言われた。初っ端からインド式洗礼を浴び、0時前にホテルに着いた。ロビーで翌日のスケジュールの説明を受け、各自部屋に向かった。明日は4時起きである…にも拘らず井口氏の部屋に集まって酒盛りが始まった。

午前5時、全員がロビーに集合した。ホテルが用意した朝食弁当を持ってバスに乗ってデリー空港に向かった。まだ5時過ぎだと言うのに空港は沢山の人達でごった返していた。

“なんてえ国だ”！ 山田先生の声だ。

午前 7:15 分オンタイムでラクノウ空港へ向け飛び立った。午前 9 時前にラクノウに着し、20 人乗りのバスで祇園精舎の名で知られるシュラーヴァステイーへ向かった。ガイドは約 5 時間の行程だと言う。寝不足気味の山田先生は、最後部座席で横になっている。土埃にまみれた草木の葉、けたたましいクラクションの嵐！トラックやオートリクシャーの排気ガスが、立ち込めている霧に混じって視界は数十メートルしかない。道路のコンディションは悪く穴ぼこだらけで道の凹凸が、そのまま尻にぶつかってくる。地面からの振動が、尻から背骨を通して頭蓋の中に響いてくる。よく眠れるなあ、と思って後ろを見ると山田先生の体が飛び跳ねていた。この貴族様はかなり意地っ張りだ。2 時間後、トイレ休憩でガソリンスタンドに立ち寄った。「おい！誰か私をぶんなぐらなかつたか？身体のあっちこっちが痛てえ。女房殿か？日ごろの恨みをなんてことはまさかないよな」と、呟きながら山田先生が降りてきた。女性陣はトイレで、私達はそこの空き地で用を足した。10 分ほど休憩をして、再びバスの中へ。「汚いトイレ！なに、あれ！」女性たちの非難の声がしばらく聞こえていた。苦行のようなバスでの移動はこの後 5 時間も続いた。途中、青空トイレを 2 回経験し午後 4 時過ぎにバスはいつの間にか村に入っていた。ほこりまみれの道路の両側に様々な店が軒を並べ、台車や路上に直接野菜や肉、魚が置かれ、檻の中にギュウギュウに詰め込まれた生きたニワトリ、軒先に吊るされた羊の生肉……。大勢の人々の話声や車のけたたましい警笛、溢れ出るように流れているインド音楽、食べ物の臭い、全てが日本と違う。規律が無く、姦しく、混沌とした世界だ。喧騒が、渦のようにバスを包んでいる。ハトバスで転寝をしながらの 1 日ではない。御年 94 歳の安中翁のことが頭をかすめる。やっと、シュラーヴァステイーに着いた。ホテルで遅めの昼食を摂った後、サヘートと呼ばれる祇園精舎跡とマヘートと呼ばれるコーサラ国の首都であった舎衛城址を見学した。祇園精舎は森に囲まれた静かなたたずまいの遺跡で木々の向こうに見える巨大なタイ寺院が印象的であった。日本では、平家物語の冒頭、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。」で知られる所である。沢山の僧侶達が遺跡の中の至る所で瞑想にふけている。僧侶たちが身に付けている衣装は色とりどりで、人種も違うのであろうか、流れてくる読経の声は数ヶ国語かに分かれているように感じた。遺跡の台座の上で 20 人ほどの僧侶たちが瞑想にふけている。その近くの遺跡の中からは、ラジカセから流れてくる読経の声に合わせて黄色い僧服を纏った 10 数人の集団が経を唱えている。小さい子供を連れた巡礼風の一団が私たちの前を横切っていく。芝生の上でお経を唱えている集団、敷きつめられたレンガの上では朱色の僧服を纏った数十人の僧たちが瞑想にふけている。ここには、私たちの生きている世界とは異なった時間の流れがあるようだ。いや、時が止まっているのだ。ここで瞑想を続けている人たちは、何日も何日も瞑想を続けるのだと言う。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂には滅びぬ、ひとえに風の前の塵に同じ。」… 頭の中に何かが入ってくる。時の流れがよどみ、音が消え、独りで

立ち尽くしているような思いに包まれた。



アオザイにスゲガサ姿の一団が遺跡の上へ上がって行く。瞑想に入るのだろうか？様々な国から祈りを捧げに来ている人達を見ていると改めて仏陀の影響力の大きさに驚かされる。貧者を保護し、給孤独長者と呼ばれていたコーサラの商人スダッタは仏陀に帰依し、都の南に精舎を建てるにふさわしい土地を見つけ、地主ジェーダ太子の望みに応えてその土地を黄金で覆った。これが祇園精舎の名の由来だと言う。仏陀はここで度々雨期を過ごし、雨安居の説法を行い、その教えを多くの人に広めた。

祇園精舎の鐘を鳴らし、並んで立っている沙羅双樹の木の下で 2 枚の落葉を拾い、別れを告げて舎衛城址へ向かった。手に持った沙羅双樹の落葉を眺めながら“本当に沙羅双樹の葉なのかな？”と思いながら遺跡の門を潜った。舎衛城址は煉瓦で組み上げられた数十メートルの高さの遺跡群で暮れなずむ夕日を背景に静かな空気に包まれていた。人を殺しては戦利品のように指を切り取っていたアングリマーラが仏陀に帰依しその悪業を悔い改めて村人の不安を取り除いたと言うエピソードの舞台となった所である。アングリマーラのストゥーバ跡を見学してから、私たちは仏陀が説法の時に坐したと言われる台座近くの城址の上に立ち夕日に手をかざしたポーズで写真を撮った。“敬虔な仏教徒が聖地として崇める場所でなんと不遜なことをするのだ、君たちは！”と、呟きながら山田先生が台座の上へ上がってきた。“全く近頃の庶民というか俗人たちには、あきれてものが言えないよ。”と言いながら右手を夕日にかざしポーズを取って“早くシャッターを切れ！”……。



ホテルに着いた時、あたりは夕闇に包まれていた。入口に植えられた数本の木々は、青や緑色のLED電飾で照明されていて、随分と豪華なホテルに思えた。この村には、ホテルは2軒しかないという。夕食のテーブルを囲みながら、しばらく談笑をし井口氏の部屋に移って酒盛りを始めた。

三日目、朝5時、まだ真っ暗だ。荷物を持ってバスに乗り込む。今日は、インドとネパールの国境を越えて釈迦の生誕地ルンビニーに向かう。紀元前5世紀頃に釈迦族の国王の息子として、ゴータマ・スィッダールタ（釈迦）はルンビニーの地で生まれた。生後1週間で母マーヤーを亡くした王子だが、何不自由なく成長し、16歳で結婚。息子にも恵まれたが、29歳の時、全てを捨て、求道の旅に出たと伝えられている。ガイドが今日は5時間の行程ですと説明するが、もう、誰も信じない。相変らず、悪路だ！道路のコンディションは悪く穴ぼこだらけで道の凹凸が、そのまま尻にぶつかってくる。地面からの振動が、尻から背骨を通して頭蓋の中に響いてくる。ガイドがマイクを持った。ルンビニーについて説明があって、“国境まで後20kmぐらいです。国境からルンビニーまでは、数十キロしか離れていません。”と言った時、“10キロか？20キロか？90キロか？数十キロなんて、いい加減なこと言うな！”と、後部座席から諦め気味のいら立った声が飛んできた。“往生際の悪い奴だ”と、すかさず山田先生が窘める。暫く静かな農村地帯を走っていたが、大型トラックの車列

が、延々と繋がっている光景が目に入ってきた。ガイドに尋ねると、国境越えを待つ車列だと言う。ネパールは、日用品や食料の7割近くをインドに頼っているとのこと。国境まではまだ15キロ近くあるという。“国境を越えるのに2～3日かかるんじゃないの？” 私たちもこの車列に並ぶのかしら？ “不安な気持ちのこもった声に応えたかのようにバスは反対車線に入り猛スピードで対向車とすれ違いながら国境に向かって驀進して行く。反対車線を走っているのに対向車がよけている。

”なんてえ国だ！ “山田先生の声だ。

正規の走行車線には、延々とトラックが並んでいる。時々、正規の走行車線に戻るが前方にトラックが立ち塞がると反対車線に入りこんで走って行く。相変わらず悪路である。穴ぼこだらけで道の凹凸が、そのまま尻にぶつかってくる。1時間ほど走ってトラック車列の先頭に出た。国境だ！ 正面に2重アーチ型の煉瓦造りの門らしき建造物が見える。ユーカリの木で作った7～8mの細い木の柱が門の前を塞いでいる。先っぽに石がぶら下がっている。紐が括りつけられていて、この紐を引っ張ることで木の柱を引き上げるようだ。アーチ型の建造物は、高さが5m程で巾が4m程、反対車線も同じだ。厚さと言うか奥行きは2m程度の安普請でとても国境の建物とは思えない。このアーチを抜けるとネパールである。国境の手前30m程の所に入管手続きを行う建物がある。数十人の人々が寄り集まっている。5坪ぐらいの事務所に3人の事務員がいて、入管書類を審査している。ガイドが、“皆さんはバスの中にいて外に出ないでください。入管の手続きは、私がやります。” と言って私達のパスポートを持ってバスから降りて行った。30分ほど経った時、安中さんが“ちょっと外の空気を吸いたいね。降りてもいいよね。” と言いながら外へ出て行こうとした。1人じゃ危ない！ 降りるなら皆で降りよう。ということになって、外に出た。お祭りの市が立ったみたいで数え切れないほどの屋台が道路にはみ出し沢山の人々でごった返している。入管事務所を覗き込むとパソコンに向かっている事務官が一人で書類をチェックしていた。カウンター越しに7～8人の審査待ちの人達がのんびりと談笑していて、審査がいつ終わるのかなど一向に気にしていない雰囲気伝わってくる。私たちのガイドは？と探していると事務所カウンターの中でもう一人の事務官と話し合っていた。後で聞いた話だが、入管の事務官と友達で、融通が効くとのことだった。待つこと1時間一寸、パスポートを持ったガイドが帰ってきた。“さあ、皆さん、ネパールへ入りましょう！ 今日、いつもより早く済みました。皆さんの善行のおかげです。お釈迦様は、よく見ていますね。” というガイドの声に“あたりめえだ”と、山田先生が反応する。こういうとき、いつもならもっと偉そうな言葉を並べるのだが、なぜか今日は反応が鈍い。つい気になって“大丈夫ですか？”と問いかけると“大丈夫なわけあるか！ あっちこっちガタガタだ！” やはり、おかしい。凸凹道をスプリングの悪いおんぼろバスで5時間以上走ってきたのだ、しかも、半分は反対車線を疾走してきている。弁護士を生業としている先生の倫理観が崩壊しているのかもしれない。暫く話しかけるのを止めようと思った時、“国境を越えます”とガイドさんの声が車内に響いた。 道路に渡した長いユーカリ竿の右端が上がっていく。バスが通過し、アーチ型の門

のようなゲートをくぐりネパールに入った。国境を越えてしばらくは周囲に街が広がっていた。やがて、家屋が次第にまばらになり畠だけになったり、それから村があったりする。ネパールは初めてだ。何となく目新しく感じられるのだが…気のせいだろう。人は多く街や村の佇まいはインドと変わりがない、というよりほとんど同じだ。暫くバスで走っていく。人は多いが、それ以上に土地はあり、作物が作られているところは一部にすぎない。粗末な布を巻いただけのみすぼらしいなりをしたたくさんのお男たちがいたところでたむろしおしゃべりをしている。人より多く働き、少しでも裕福になろうという欲望が欠けているのだろうか？ この人たちの生活には歴史に裏付けられた流れがあって、結局はその流れに流されていくだけなのだろうか？ 頑張ることはその流れにあらがうことになるから、今日が暮らせればいいということなのだろうか？ その気になれば、もっと裕福になれるのにと、つい思ったりする。生まれた時からただ日々の生活があり、それが死ぬまで続くのだろうか。あっちこっちでたむろしている男達の話は、ただの言葉であり、彼らの人生に関わってくるものではなく彼らは身の無い話し相手を求めて集まっているだけなのだろうか。それにしても人々の中に感じられるこのエネルギッシュな生活感は何なのだろう。などと考えているうちに眠ってしまった。……続く